

油山の宝物さがし ～「江戸時代の福岡藩の山林」と「2年間の活動でみつけたこと」～

「昔の油山は誰がどのように利用してどんな山だったの？」と「油山の宝物さがし」活動で探り、2カ年余りたちましたので、まとめて振り返る活動日をもつことにしました。

また、森林は育成や利用に社会状況の影響を受け、かつ成立に時間がかかるのですが、これまでの活動で私たちが知ることができたのは主に明治以降でした。そこで、今回は冒頭で、江戸時代の福岡藩の山林についてお話をうかがうことにしました。

【プログラム】

とき 2012年10月14日(日)

10時～14時半

午前 基調講演「江戸時代の福岡藩の山林について」
宮野弘樹氏 福岡市博物館学芸員

午後 報告「2年間の油山の宝探しで見つけたこと」
松雪清人氏 森を育てる会

■「江戸時代の福岡藩の山林について」

1. はじめに

福岡市博物館で江戸時代の福岡藩、黒田家関連を担当している。また、地域の史実の確定なども行っている。

平成23年の企画展示「江戸時代の山林」の内容を中心に紹介する。

2. 山林資源とくらし

江戸時代の暮らしは山林に支えられてきた。建築資材、燃料の薪、台所のおひつ、しゃもじ、外出時の提灯、笠、下駄など生活のあらゆるものに及び。プク

3. 描かれた江戸時代の山林

江戸時代のはじめ、黒田長政は福岡の海岸に松を植林させた。松林は防砂林であり、材は資材、葉は燃料でもあった。

中期に描かれた「形相図(ぎょうそうず)」にも海

岸線に松がみえる。

また、「筑前国絵図」で、藩主の猟場だった若杉山を見ると、木が非常においしげっている。

山林資源量を把握するため描かれた「竹山之図」は役人のスケッチだが、木の分量が薄い濃いでしっかり描き分けられている。東平尾公園あたりがはげ山だったことがよくわかる。

これらの絵図から藩内の山林の中に利用がすすんだ場所、保護された場所があることがわかる。

4. 山林は誰のもので誰が管理したのか



基本的に藩の領内の山はすべて藩主のもので「御山」(おやま)と呼ばれた。そのなかで良材を出す山、藩主が鷹狩りをする山などは過剰な利用がないよう藩が直接管理した。

しかしすべて藩が直接管理するのは大変なので、藩にお金を上納すれば、森林の育成を条件として藩士や農民が使ったよい山もあった。管理の手法によって御山には以下のようにさまざまな種類がある。

「御山」「ご用山」「公儀山」：良材が産出、または藩主の狩りの山。狭義の「御山」。

「拝領山」：藩士に森の育成を条件に与えられた山。立ち木の利用は無償でできた。

「預かり山」「預け山」：藩士・農民が山の育成が条件だが、下草や薪が採取できる。10年たつて木が育っていないと召し上げ。



「立山」：預かり山と似ている。福岡藩士の古文書に「立山証拠のこと」と題したものがある。立山証文と呼ばれるが、きちんと育てるように、という内容、面積、地名など書いている。このようなものを藩士に出した。

「野山」「札山」：農民が利用する下草、薪の山。草が生えている山。

「留山」：利用しつくして何もなくなり、利用禁止となり、植生回復を待つ山。禁猟区にもなった。

このように福岡藩では山の名称は利用の状況等によってつけられた。他藩ではその藩なりのシステムがあった。

この他、農民の屋敷周囲の藪についても藩のものとみなされ納税や供出が命じられた。

また、村には山の管理を担う役人が巡回し、現場をみていた。和臼の村役人をしていた家に残っていた古文書では、門松のためによい松を見届けて用意すること、とある。当時の門松は松まんま一本建てたので、消費としては激しかった。

5. 御山帳に見る油山周囲の山林

御山帳（おやまちょう）とは、村にあるさまざまな御山の種類、面積、管理者をまとめたもの。村ごとに調べたものをまとめ郡ごとに綴っている。

この「早良郡御山帳」は現在国立公文書館が所蔵しているが、元は熊本の森林管理局が所蔵していた明治以降の九州の森林管理署の資料 3,000 件余りのひとつ。この御山帳のように江戸時代からの古文書も一部引き継がれていた。

福岡市域の御山帳は席田郡、粕屋郡以外揃っていたので、企画展示の折、まとめてパネル「福岡市域山林面積」を作成した。

早良郡では鳥飼村にあった西の松原6万5千坪が広い。藩士の預かり山、お寺の拝領山などとして管理されている。油山ちかくでは、東油山村全体で15万坪となっている。内訳は拝領山（武士に与えられた山）が多い。

6. 明治移行期の山林

明治初期の山林にかかわる動きは以下の通り。

1869年 藩籍奉還 土地と人民を朝廷に返上。

1871年 廃藩置県 地券の発行開始。

1872年 壬申地券が本格的に導入され、土地の売買ができるようになる。

1873年 地租改正法 地価の3/100を納税。

江戸時代は大名ごとに地方分権で税も物納が基本。明治になって中央集権的な政権になり、貨幣で納めるようになった。そのため所有者を確定することになった。

武士が与えられていた拝領山は官有地にされることが多かった。後日、召し上げられた人が「先祖から拝領山としてきた山が廃藩置県でお引上げになって、また下げ渡しになるらしいから是非お願いします」と「山林お下げつけ願い」といった書類を出すこともあった。

集落で利用していた入会地は個人名義となることもあったが官有地となることも多かった。

山は明治の中ごろが最も荒れていたといわれている。近世までは藩の締め付けもあり、また村では管理を厳しくしながら共同利用してきたが、明治以降工業化の必要もあり過剰な利用がすすんだ。

これについては、千葉徳爾「はげ山の研究」で触られている。はげ山ができる原因はいろいろあるが土地の土壌（はげ山に一番なり易いのは花崗岩）、気候（瀬戸内海が雨が降らない）、人の過度な利用としている。

Q.&A.

Q.福岡藩の山林管轄区域は？

A.筑前の国が福岡藩。糸島は入り組んでいて、中津藩領、対馬藩領、天領、時代によっては唐津藩領もある。このあたりと秋月藩を除いた残りの筑前

の国が福岡藩の森林管理の範囲。わりと広い。

Q.御山帳の目的は？

A.根本台帳なのでいろんな使われ方をしたと思う。

税の基礎、管理者の確定など。

Q.御山帳は更新されていたのか？

A.赤字で書き足し、紙を貼って書き足している。

Q.福岡藩では大規模な土木工事はあったか？

A.築城期に福岡の町と城をつくったのが最大。

その後新田開発が糸島の方であったり、遠賀川で治水工事もあった。材木を大量に使う工事としては、福岡城下の橋のかけかえが20-30年に一度あった。その場合、材木は御山から、労働力は橋近辺の人が負担。西中島橋の材は若杉山からという文書がある。

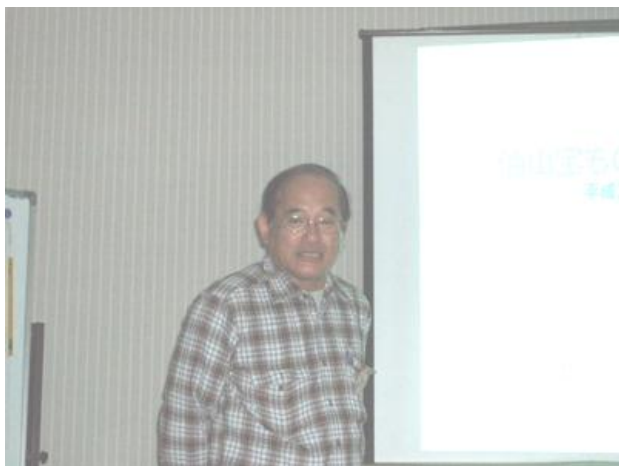
Q.入会地について

A.村の慣習で運営されていて、記録に必ずしも残っていない。村の古文書も丹念にみていく必要がある。

Q.国有林と江戸時代の区分の関係はあるのか？

A.地租改正時、誰のものになったか、そのことが以降の所有につながっている。

■「2年間の油山の宝探しで見つけたこと」



明治時代の地図に、油山周辺で現在の幹線道路の原型となった道が見られる。柏原から那珂川町へむかう道は現在つけかわっているが、旧道の一部は残り、昔が偲ばれる。また、山田橋-水の森-山頂の道は明治の地図、終戦直後の航空写真にも明瞭に見え、重要な道として使われたと考えられる。

油山周囲の村では農業、養蚕もさかんだった。

大正時代の記録、早良郡志に周囲の村の人数など記載があるが、これが当時のバイオマス生産で支え得た人数なのだと思う。

昭和初期は油山はアカマツ林が多かった。杉も出荷されていた。杉伐採後は山を焼いていた。

炭焼きもされていた。油山のあちこちに、炭やきがま跡を見ることができる。

戦後しばらくまで、はげ山やアカマツ林の多い山だった。家庭の燃料としてこのころまで収穫後の菜種の茎などがよく使われた。

柏原では各家の山で薪をとり、東油山では山主から薪を買ったり、枯れ枝を拾う代わりに植えつけの手伝いに行ったりした。

国有林でも伐採搬出、炭やきなどおこなわれた。

昭和後半に宅地化がすすみ人口が増えた。

以上について資料でも調べたが、地元で山林と深くかかわってこられたお三方からはじめてうかがうことが多かったと感謝している。

■当日配布資料

「江戸時代の山林」 福岡市博物館部門別解説 390
「油山の宝物さがし中間報告」 森を育てる会

■活動日をふりかえって

江戸時代の山林の様子を目に見えるように、とてもわかりやすく語ってくださった宮野さん、ありがとうございます。

続く松雪さんの報告とあわせ、江戸から昭和までの油山の変化が絵巻物のように感じられた一日でした。

意見交換ではこの活動で得たことを保全作業、山の新たな価値の見出し等に活かしていきたい、など様々意見が出ました。

講師からは油山は縄文時代のどんぐり利用、中世の山岳宗教等、時代毎に様々な森林の利用があり、それを視野に入れた多様な活動展開の可能性がある場所である、と励ましをいただきました。重ねて厚くお礼申し上げます。(文責 柴戸)